

川連法眼館の段 此処槽下曲豆竹古鞆太夫

相勤申仕



万月の人形操踊



醉徳の夜 藤楽交

江戸

★ 戦 亞 東 大 う か 抜 ひ 戦 ★

諜

防



たつ語で密秘  
るれ洩は密秘

# 乍憚口上

熱風に翻へる日章旗の勇ましき私ども國民には唯々感激感謝あるのみでございます。従つて當座太夫三味線人形連中一同に於きましても愈々皇軍に感謝の一端を現はすべく將た又銃後の皆々様に對しまして御盡します事は唯職域に於て十分の御奉公を申上ぐる一途あるのみにございます。引續きまして來る六月興行に於ては愈々文樂座獨得の古典狂言より選擇を重ねまして豪壯なる時代狂言艶麗なる世話狂言等取り交ぜて尤も御興味深く配列いたし、いづれも日本精神の眞髓に觸れて聊かもゆるぎなき文樂趣味の最高調を御尊覽に供する次第でございます。尙此度吉田玉藏儀四代目吉田玉造を襲名致しますれば何卒例月につきましまして賑々敷御來場下さいますやう偏に御願申上奉ります。

昭和十七年六月一日

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十七年六月一日初日

初日 午後二時開演

平日 午後三時開演

## ・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席 是五日前より  
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣電話 南 76 四七臺番

一般御用の電話 南 76 三〇三二番  
三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

# 六 月 の 人 形 淨 瑠 璃

演出總形人・線味三・夫太

六 月 一 日 初 日

初 日 午 後 三 時 開 演  
平 日 午 後 三 時 開 演

第一 安宅

たかの

せき

勸進帳の段

第二 由良湊千軒長者

食満南北脚色  
西亭作曲

大塚克三舞臺裝置

橋女居間の段  
折檻の段  
鶏娘の段

第三 義經千本櫻

道行初音の旅路  
川連法眼館の段

第四 生寫朝顔日記

島田驛宿屋の段  
大井川の段

# 関 雲 翁

勧進帳の巻



勸進帳の段



ほろ

番	番	常	片	駿	伊	源	富	武
卒	卒	陸	岡	河	勢	義	樫	藏
鶴	竹	坊	八	次	三	經	左	坊
澤	本	豊	郎	郎	郎	竹	衛	辨
清	本	竹	竹	竹	竹	本	門	慶
次	呂	伊	本	千	本	本	竹	竹
郎	賀	勢	三	富	源	住	大	大
	太	太	瀧	駒	太	太	隅	隅
	夫	夫	太	太	夫	夫	太	太
	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫

安あ

宅たかの

關せき

勸進帳の段

所謂「勸進帳」——安宅の關を淨瑠璃に取り入れたものに貞享三年（二三四六）宇治加賀椽座の演し物、近松門左衛門作「凱陣八島」（その第二段目、義經道行の件り）があり、更に同じく近松作正徳三年（二三七三）竹本座上演の「穠靜胎拮」（その第四段目安宅關の件り）等があつたが、この度の「勸進帳」は謡曲「安宅」より進展して歌舞伎十八番の一つとして完成した様式美を誇る長唄のそれを更に淨曲化したもの。明治廿八年、博勞町彦六座跡の稻荷座初演の、名人豊澤團平によつて作曲されたものである。

梗概

關守富樫左衛門は番卒を従へて出で、頼朝義經御仲不和となり給ふにより、判官殿主従作り山伏となつて陸奥へ下向のよし、鎌倉殿聞召され國々

人形役割

源 義 三 郎 經  
 伊 勢 三 郎  
 駿 河 次 郎  
 片 岡 八 郎  
 常 陸 坊 慶  
 武 藏 坊 辨 慶  
 富 樫 左 衛 門  
 番 卒

桐 竹 龜 松  
 桐 竹 政 龜  
 吉 田 玉 德  
 吉 田 多 三 郎  
 吉 田 小 兵 吉  
 吉 田 榮 三  
 吉 田 玉 助  
 大 ぜ い

野 澤 八 三 郎  
 野 澤 三 郎  
 鶴 澤 友 三 十 郎  
 鶴 澤 友 郎  
 鶴 澤 網 清 延 友 郎  
 竹 澤 團 網 清 延 友 郎  
 豐 澤 仙 團 網 清 延 友 郎  
 鶴 澤 德 仙 團 網 清 延 友 郎  
 若 松 作 延 友 郎

に新關を設け、山伏を堅く詮議せよとの嚴命にて  
 某此關を相守ると語り聞せて番卒に警護を申付け  
 る。

間もなく義經を先に片岡、伊勢、駿河、常陸坊  
 すこしおかれて辨慶が立出る。

南都東大寺建立の爲の勸進の山伏なり、關をお  
 通しあれと願つた處、富樫は山伏たるもの通行ま  
 かりならぬと答へれば、言語同斷この上は觀念し  
 て最後の勤めをなし尋常に誅せられんと、辨慶は  
 四天王とともに珠數押揉んで祈る、富樫は殊勝の  
 覺悟と感じ入り、東大寺勤進の僧なれば勸進帳所  
 持なさんと尋ねる。

咄嗟の機轉、辨慶は笈の中より一卷取出し、勸  
 進帳と名付けつゝ大音に讀み出す。

富樫は今疑ふべき所はないが、事の序でにと  
 て、山伏についての故實因縁を續けて問ふ。響の  
 聲に應ずる如く辨慶はよどみなく答へ果せる。

愈々感じ入つた富樫はかゝる尊き客僧達をしば

しにせよ疑ひ申せしは眼あつて無きが如し、今より某勸進の施主につかうと番卒に命じる。

一同が關を通らうとする時番卒の一人が強力姿の義經に眼をとめ富樫にさゝやく、押取刀で富樫が強力を呼留めれば、すはこそと辨慶等は驚き何

とて此強力を御留め候ぞ、判官殿に似た強力めは一期の思出でエ、腹立や、日高くば能登の國まで越えうすると思へるに僅かの笈一ツ背負ふて後にさがればこそ人も怪むれ、此程よりやゝもすれば判官殿よと怪められるは己が仕業の拙き故なり、

と金剛杖をとつて散々に義經を打据え、富樫のこ  
とばに双方互に詰め寄つたが、辨慶は味方を制し  
まだ此上に御疑ひの候はゞ此強力め荷物の布施諸  
ともに御預け申せば、如何やうとも糺命なされい  
但しはこれにて打殺し申さんや、と打殺さんず勢  
に富樫も番卒どもが由なきひが目より、判官殿に  
もなき人を疑へばこそかく、折檻もし給ふなり、  
今は疑ひ晴れ候ふ、とくく誘ひ通られよ、と其

儘番卒引つれて退く。

ほつと息した辨慶は、思へば計略とは云ひながら、主君を打ちし冥加の程もおそろしや、と詫び入れば、義經は辨慶の手を親しくとつて、機轉故にこそ危き所を免れたりと喜ばれる。

辨慶は今日までの主従が並々ならぬ辛苦を泌々と述懐し、はかなき君が御身の上を歎いて、いざ立たうと云ふ處へ、富樫は番卒に酒を持たせて再び現れ、最前の無禮無作法を詫びる心に一献勸める。

喜んで辨慶は酔を發し、延年の舞を舞ふ。

舞のうち辨慶は、主従をさきに落しやり、自分も笈をおつとり肩にかけ、毒蛇の口をのがれる心地してその後を追ふて行く。

### (佐和利) 勸進帳の段

いかに申し候、扱も只今の氣轉更に凡愚のなす業にあらず、只天の加護にこそ思へ、關の者共君をあやしみ生



涯限り有りつる所に、とかくの是非をもんどはずして、我君を助ける事我れの及ぶ所にあらず、驚き入つて候、それ世は末世に及ぶと云へども日月未だ地に落ち給はず危き難をさけたるも全く君の御武運を神明佛陀の守護ある印、ハ、ア有難し、去り乍ら敵を欺く計略なれど正しき君を強力とするさへ冥加至極と思ふ上、杖にて主君を打ち咎め空恐ろしき天罰を受くべき我れはいとはねど御痛はしき御身の果でと、思へば上げし此杖は幾千貫のかなへより遙かに重き心地して日頃鍛へし此腕もしびれる如く覺えしぞ土にひれ伏し三拜九拜、君を敬ひ奉りつゝには泣かぬ辨慶も一期の涙ぞ殊勝なり。

## 文樂座小史（昭和十七年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十八年以前）  
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年前）  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始  
メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル



情

橋女居間の段

豊竹和泉太夫  
鶴澤清八

食清南北脚色  
西亭 作曲  
大塚克三舞臺装置

由良湊千軒長者  
ゆらの みなと せん げん ちやう じや

橋女居間の段

折檻の段  
鶏娘の段

人形役割

折檻の段	豊澤仙糸	豊竹呂太夫	吉田榮三	吉田小兵吉	桐竹紋太郎	桐竹門造	吉田光之助	雄人	弟	要	召使	召使	橋
------	------	-------	------	-------	-------	------	-------	----	---	---	----	----	---

(床本) 橋女居間の段

水の性は清と欲すれども河石これを穢し、人の性は平を欲すれども貪慾これを寄すとかや、時は寶龜三の年、こゝ成相の山眠る興謝の海邊の由良湊三ヶの莊の主とて時めく長者三莊太夫音に聞こへし人づかひ、辛き目見せて責めつかへば山椒とも亦異名せり、親に似ぬ子か橋女とてみめうるはしく氣は優しく、殊にめづるはくだかけの、廻り相性との年、けふ此頃の物思ひ、沈み勝なる部屋の内、女共は口々に申々橋女様またうつとりとしてござりますか、何ぼうお慕ひ遊ばしても知らぬ他國で只一目、氏も素性もお名前も知らねば便りせんもない、泣

人形役割割

三矢弟要對安對 三矢弟要對安對  
 田莊 田莊  
 部 部  
 綱 綱  
 太 太  
 人 人  
 繼 繼  
 雄 雄  
 人 人  
 丸 丸  
 姫 姫  
 娘 娘  
 王 王  
 壽 壽  
 段 段  
 野 野  
 竹 竹  
 竹 竹  
 本 本  
 織 織  
 勝 勝  
 團 團  
 太 太  
 芳 芳  
 六 六  
 夫 夫  
 司 司  
 郎 郎  
 助 助  
 造 造  
 助 助  
 造 造

人形役割割

三矢弟安對要 三矢弟安對要  
 田莊 田莊  
 部 部  
 綱 綱  
 太 太  
 人 人  
 繼 繼  
 雄 雄  
 人 人  
 丸 丸  
 姫 姫  
 王 王  
 壽 壽  
 吉 吉  
 藏 藏  
 改 改  
 め め  
 吉 吉  
 田 田  
 田 田  
 玉 玉  
 玉 玉  
 榮 榮  
 三 三  
 造 造  
 助 助  
 造 造  
 三 三  
 助 助  
 造 造  
 三 三  
 司 司  
 郎 郎  
 助 助  
 造 造  
 三 三

ツレ

野竹竹 澤澤本 勝團織 太

芳六夫

いて斗り御座つても何とやら、オツそれ〳〵雲にかけ橋  
 橋女様、霞に千鳥じや御座りませぬか、三人よる〳〵茲  
 しましき、ア、コレ何言やるはしたない事聲高に聞くも

中々胸せまる、もふ大がひにしゃいのふとたしなむる言  
 葉も空も曇り勝、つもの雪道やう〳〵にたどり着いたる

盾部要人、忠義の道には違はねど、安壽姫對王のお行衛  
 方々尋ねわび、この家の軒にのみてなれぬ雪路に旅の者

不知案内に難澁いたす、迷惑至極と存せども何卒今宵一  
 夜の宿まげて御無心申したしと慇懃に、禮儀をつくせば

女共、橋女様お聞き遊ばしましたか、どふはからひませ  
 ふやら、それはさぞかし御難儀ならん、これへお通し申

しましやと情けの言葉の尾について、サア〳〵お許しぢ  
 やちやつとお這入りなされませ、すゝぎ取るやら足ふく

やらお寒かつたでござりませふ、かわる〳〵のもてなし  
 に要人は一禮しこれは〳〵御親切なる御もてなし忝ふ存

ずると言ふ顔を一目見るより橋女はびつくり、ヲ、あな  
 たじや〳〵よふマア御出でなされたと、うつゝに見とれ  
 空心、エエそんなら橋女さまの病氣のもととはマア〳〵よ  
 ふこそ〳〵ソレお蒲團、お火桶とやさし手ン手のもてな



しに、こなたは呆れて只もじく、エ、モチャつとお傍  
 へござりませいと、つきやられては娘氣の、嬉しさこわ  
 さ耻しき何と言葉もかけ守り、そつと拜んで鶏の方よう  
 ぞ逢したもつたと手を合はしてぞ打守る、こなたはそ  
 れと座を正し、恐れながら主の殿にも一禮申したし、  
 お逢はせなされて下さりませと言葉にハツと顔赤らめ、  
 その主こそ父にて候三莊太夫この里の地頭格、ナニスリ  
 ヤアノ三莊太夫殿とな、さてはお主のある家かと胸に一  
 物心の喜び何かは取り入りさぐらんとわざと言葉を和ら  
 げて、聞き及ぶ由良の長者、數多の男女もお召抱へと聞  
 く私奴も下僕の内へお加へなされ下さりませぬか、ヲ、  
 それはお安いことナア橋女様、サア、あなたのお身の  
 上も何も彼もちやんとお聞きなされませい、どれお客様  
 にお湯漬なと差上げませふ、いふを言葉のしほにして打  
 連れ奥へ立つて行く、後に橋女は面はゆくさずがおぼこ  
 のあどなきに、今更何と云ひかねてうつむく顔の憎くか  
 らぬ、要人いよ、かたちを正し、一樹のかげ一河の流  
 れついに見馴れぬ方なれど、かくも優しいおもてなし忝  
 けのふ存じますと言葉に、娘はうらめし氣ついに見馴

れぬとは聞へませぬ、縁あればこそけふの今、二夕とせぶりの嬉しいお目もじ、あなたは去年の夜月半、奈良の都の藤の花、その春日野の若草かげ、フム一際目立ッおみなづれ何處の誰れの花やらんと見やる折しも青葉吹く風に散りたる我冠、アレヨと追ひし其折ふし、不思議に我手におかむりものおかへし申した其時に、フツと思ひのたけながきつい耻かしさにお所もお名も聞かねば其儘に別れ〜に本意ない年月、どふぞ今一度逢ひたい思ひ鶏に無理ばつかりの願ひ事、鳥も情けを知る事か嬉しい逢瀬成相のとりもつ縁かと斗りにてとんと身を寄せ涙ぐむ千束の戀や積るらん、それとうかがふ太夫の腹心、三鈴の弟雄足音盗み一間の内知らねば要人聲ひそめ、切なる思ひ察しいる、この上は父にて候三莊太夫殿是非御逢はせ下さりませ、それは又どふした御用、されば越後の國扇の橋にて人買ひの手に渡しし年若き女、今一人はいたいけなる童、たしかに此家と人の噂、尋ね参りし某こそはと言はんとするを押とぐめ、ア、コレめつたな事をおつしやりますな、妾の外は見る眼かぐ鼻、フムうなづき囁やく一間の内、弟雄は笑くば間の扉を閉ざすも知ら

ぬ夢の夢、はかなき戀に目さむらん。

### (床本) 折檻の段

目さむらん、早暮近き館の内、しわき長者の灯火はいと暗き見えわかぬ、扇の橋にてかどわかされ、別れ〜に佐渡と聞く母親戀しや身のつらさ、暗き思ひの對王丸安壽姫は馴れもせぬ賤が手わざの鎌扱こぼるゝ沙からき涙、人の情けを茹しばや、肩もくひ入る手も足も、つまづく石に切りさかれ、流るゝ血汐血の涙、海邊に出でゝ泣む汐より太夫の心波みかねて、泣々連立かへらるゝ、申し姉さん、いても苦患、歸つても奈落の底のこの館、早ふこゝをのがれたい、オ、對王イヤ忘れ艸や毎日日にち同じことほんにいつになつたら世の中の情けに救ひ出だされて、母様に逢はるゝ事もないじやくり、背なでさする對王も俱に涙ぞ哀れなる、三莊太夫は世をのろふ、眼するどく骨太く、情白髪のはつは針を植えたる針の山、地獄の相か閻王の罪人にらむ如くなり、のさ〜出づる一間のうち、それと見るより聲をかけ、信夫忘れ艸戻つたか、ハ、ハ、只今戻りました、もふるへ聲

また夕間ぐれに戻つたとは爾躰今迄何してゐた、ヤイわつばめ柴の苜蓿、汐の汲み菴梅ソレ見せ、ハ、ハイ、とつくりと見届くるぞと取出す眼鏡の光小氣味悪さに二人はおづ／＼、ハテ扱何を躊躇きり／＼これへ見せおろふハ、ハイ、こわ／＼ながら差出せば、じろりと見て、フム子供の腕にしては見事な切口、ハ、ア聞へた、コリヤ何かまた情らしい奴等が手を貸して汲んで貰ふたか、イ、ヤサ鎌の手傳受けおつたな、そいつは誰だ、それともこれがうぬ等の手業ならあすからは三荷の柴を七荷増し十荷の柴を茹りて来い、又信夫は桶の汐を五倍増し汲んで来い、エ、エー、ナ、何驚く事が有らふ、人われにつられれば、われ又人につらしのたとへ、去ぬる養老のとしわれ未だ若かりし日、この手に蝶よ花よと育てし男子人買の手に奪はれて行衛新羅か高麗百濟、いづくの空か戀しき我子、この手へ戻せ返せやア恨みは長く氣は短かし、われも人の子買とつて、我子に酬ゆるこの年月、菴山野山舟持ちの長者と人にうたはるゝも我一念の屈きしか、鬼とも罵しれ、蛇とも叫べ、われにはわれの信念あり、血で血を洗ろふ心の腹いせ、サアこの柴は

うぬが茹つたか、この汐はおのれ一人で汲んだか、わいらが手業ぢやあるまいがな、何奴に助けられたかソレ吐かせ、ア、アイ、エ、ぬかさにやおのれたい目見するぞ、と立上り庭に下りしも一間より弟雄つゝと走り出でフム御折檻の折なれどお耳に入るゝ事こそあれ、近よつて耳に口囁やく始終聞とる太夫、フムよい時よい折其奴これへ引け、三つがなわにて責め問へば自らなる素性は明白フ、フ、早ふ／＼と駈附けられ、ハツといらへて駈けて行く、太夫はじろりと二人を見て、ヤイ兄弟うぬ等は岩木の朝臣眞楯の胤、姉は安壽、弟は對王、エツイヤ、かくすな／＼、かねてより隣國の矢田部の綱繼この太夫に申付けられし詮義の兩人、これ随分かくせ云ふなよ、今うぬ等に會はす者こそあり、ヤア／＼弟雄其者これへ、と呼はれば哀れ手疵によりはて、今は敵たふ力もなく十重二十重のいましめに盾部は引かれ大庭にあら／＼しくもすえらるゝ、はらから見るより、ヤアそなたは、といふを云はせず、ア、コレイ若い女中にいたいいけの童この身は知らぬよその人な、と目顔で知らせば賢しくもほんによその伯父さんさうな氣の毒にこの繩目いとしや

のふ、と勢はる情、要人は目をしばたゞき、見ず知らずの私奴におやさしい其のお言葉、忝ふ存じますが、今はこの身もいましめのどふする事もかなわぬ躰、お言葉をかけられては却つてお身の爲になるまい、御息才のお顔を見てイヤ息才そうなお二人様、随分お身を大切に遊ばして下さりませ、とあとは得云はずハラ／＼と、こぼす涙の千萬無量、云はで碎くる兄弟の心の内こそいじらしき、弟雄は中に隔ての垣、ヤイ若者、この家へ入込みあまつさへ橋女とあやしい語らい残らず聞た此弟雄、サアかう並べた上からは、うぬも主人兄弟を尋ねに下つた岩木の家の子某と名乗つてしまへ、忘れ艸信夫も亦眞楯の胤と白状せい、どうだ／＼、威猛高、太夫は庭をじろりと見やり、手ぬるい／＼ぶちすえい、家の子ならば猶更に主の兄弟眼の前に責め問ふ折檻、相恩の胸にこたへてぬかすは必定ソレ弟雄、と聲かくれば得たりや應と兄弟を同じ繩目に引きすえて、打つやしもとの責せつちやふ、まゝならぬ身をへだての楯、右と左にうちわくるなほ手ぬるしと三莊太夫火桶に鐵きうさし込み／＼、弟雄ひかへい、ハツ、ヤイ忘れ艸、ハ、ハイ、信夫よ、ハイ、

兄弟の者よく聞けよ、われは元來隣國の地頭矢田部の綱繼に見出され今三ヶ莊のあるじ、これとても綱繼の息、さればこそ矢田部の仇たる朝臣眞楯その小伴は吾等にも仇、何事も眞直に言へ、うぬらが親は岩木の朝臣眞楯と云はうがの、イエ／＼その様な者ではムりませぬ、それなれば問ふ、その若者、このはらからこそ對王安壽であらふがの、存せぬ事、さうか／＼よし／＼どれもこれも強情な、憂い目つらい目とし奇つてしたくもないがこれも因縁覺悟致せ、邪慳の炎に燃え立つ燒鐵、かたへの布にしつかと巻き庭に下り立ち目先へつきつけ、ヤイ三人共どちらからでもまことを云へ、云はぬとうぬ等どのつらへこう當つるぞ、あなたこなたへつきつくる、折しも降りくる大雪に打つやしもとの苛責の責、傍にあぶ／＼要人が身はまゝならぬいましめの、エイこの繩といて下されかし日本國の神々にも見放されたか淺ましやと、三人が涙一時に由良橋立に成相の潮満ちくるが如くなり、後ろにすつくと矢田部の綱繼、太夫よくぞはからふたと言葉をかけて上座へ直れば、オ、矢田部殿かよくこそ御入來、一禮すれば、弟雄よりの知らせによりひそかに來

たるこの綱繼、こ奴どもの口々よりそれと聞かねどすべ  
ては察した、今宵は此家にあつて明くれば寅の一天くだ  
かけの鳴くを合圖にはらからは受取歸らん、またその若  
者の首打ちて後日のわざはひ絶つがくつきやう、フムそ  
れでは曉の鶏を合圖、ソレ弟雄兄弟は第一の岩屋へ、そ  
の若者は第二の岩屋へ別れくにつなぎおけ、心得たり  
と引立てく、三人はひとやへ兩人は奥の間へ。

### (床本) 鶏 娘 の 段

入相の鐘しんくくと更け渡り、雪も音なく由良の戸の  
波路に消えて静かなる、戀に泣く音か濱千鳥、沖に漂ふ  
身は捨て小舟、不憫や橋女は降雪の凍る冷たさおぼえな  
き素足にソツと岩傳ひ、すべりつこけつ踏みしめつ、う  
かゞひ寄りし巖の傍、要人さまさぞ寒かるふ冷たかる、  
逢ひたかつたも忍び音にあたりはぐかる泣いじやくり、  
内にもハツト心付き、そう云ふ聲は橋女殿、どうして愛  
へ何しに、と問はれて橋女はうらめし氣に、何しに來た  
とは胴忿な、その曉の鶏啼けば、いとしお前は双の下、  
たとへ此身は死す連も、どうぞお前は助けたい、いとし

お前が助かるならそれが本望わしや嬉しい、丹波大江の  
山よりも増る思ひや、八雲立つ出雲八重垣妻ごめはほん  
に果敢ない縁の綱、岩戸の神の恵みもあらば、只いつま  
でも常闇にあれかしものとかきくどき、彼方此方へうろ  
くくく、押せども引けどもゆるぎなき岩戸の格子に取  
りすがり身を打伏して嘆きける、次第に時も過ぎ行けば  
いとしくだかけ時の鶏、可愛がらるゝ其人の近づく音に  
一羽二羽呼び覺されて羽ばたき、娘はびつくり走り寄  
り、ア、コレ鶏よ起きやんなや、起きてたもるなや  
今宵一夜は夜が明けても必ず時を告ぐるなよ、いとし殿  
御を助けるまで啼いてくれるなコレ鶏よと、頼めど詮も  
其の甲斐も曉近き明けの空、鶏は時知る羽たき、ア、  
悲しやアレく、羽ばたきするは時を告ぐる身づくろい、  
エ、モどうぞ仕様はないかいのふ、と思はず一羽を抱き  
しめ、コレ必ずく、啼きやんなや、日頃そなた達を可愛  
がり守り神とも崇めた妻、たとへ鶏じやと云ふたとて、  
はぐみ育てた恩知るなら、啼いてくれるな啼きやんなや  
そなたが啼いてたもるとの、わしがもふく、身にもかへ  
ぬいとし可愛い大切な殿御のお命ない程に、願ひを聞い



て必ず啼いてたもるな、ねんねこせい、ねんこね〜ねんころりねんねのお守りは何處へ行た、なでつきすりつなだむれど、のう其甲斐も情けなや、向ふの泊り木こなたの塙、多くの鶏の時告げ時羽打羽ばたき、ばつたばた橋女はうろ〜氣も半亂、あなたこなたと追ひ廻す棲も裳もひら〜ひらり飛んだる鶏の、羽先きつかんで大地へころり我身もころり、ころ〜起上つてはかけ廻り、只身一ツに詮方も、こりやマアどふせふ〜と、撞と伏してぞ嘆きしが、すつくと立つて泣く目を拂ひ、ヲ、それよこの日の本は神國の曉告ぐるくだかけに、天の岩戸は開かれし、其古ことを逆しまに戀しと思ふ我が夫に別れを急ぐ鶏の音を留めて見せふ、ヲ、留めいで置かふかと一心こりては目も釣り上げ、見上げ見下るす泊り木鶏籠、エ、モ煩惱の犬ともなれ鷹ともなれと、追ひつ追はれつ右左り、のがれがたなの此場の苦患、八寒地獄畜生道心は紅蓮大紅蓮、とけて亂れて黒髪もときかともまがふ鶏姿、蹴爪いからす其形相、因果はついに己が口一聲高く東天紅、思はずさぐ耳と口、當てれど叫ぶ東天紅、ハア悲しや今啼いたはどの鶏ぞ、一鶏啼けば萬鶏

のうたふ曉明けの空、我身が啼くとは白鷄を憎しとつかみ岩屋の内、投げつけやればこれはそも、娘の一念要人が繩喰ひちぎれば力を得て、かくしもつたる懐刀、牢屋の格子切り開く、外には女の念力に思はずばつたり開く戸の、ヲ、橋女どの、要人さま、後は得言はずすがり泣き、つきせぬ縁要人は、チエツ忝けなし有難し、禮は萬言盡きせねど、心もせくは御主君の忘れがたみの安壽姫對王様を共々にお救ひ申しまいらせん、無事できへあるならば必ず會ふ橋女殿、ノウ嬉しい要人さま、其御詞が身の果報名残りは盡きねど今此時、片時も早ふお二人様を、ヲ、心得申した忝けなしと駈け行かんとする後の方ヤア不敵の若者そこ動くな、と聲かけられて娘は驚き、コレ父さん、どうぞ赦して、見逃してと取つく橋女を引退け〜、エ、いらざる娘の罰當りめ、コリヤ若者、おのれ助けてよいものか、刃のさびになりおれと切つてかゝればこなたも亦、大夫覺悟と突かゝる、娘ははら〜マア待つて、まつて〜とうろ〜、戀と義理との隔ての垣、あなたを止めこなたにすがり、思はず一聲東天紅、因果の聲に父親はハットたじろぐ其すきを得たり

と突けば丁と受く、とたんの拍子太夫が太刀、鐔元ポツキリこりやどぶじやとたじろぐひまを又一突、身をかわして手元を押へ思はず見入る稀代の刀、ヤ、コリヤコレ月山が九寸五分、差裏に不動の文字、これがどうしてそちの手に、ヤアそれを聞いて何とする、これこそ父が遺身の品、エツそんならお前はそもやそも鹿比丸とは言はざりしや、如何にも幼名は鹿比丸今の名は盾部の要人、エ、エツそんならそちは倅であつたか、ナ、何と某を倅とは、ヲ、昔の名は鈴村兵庫、今は三ヶの三莊太夫、エ、エツとびつくり三人はしばし言葉もなかりしが、父は大聲コリヤ娘、赦してくれいゝゝゝ、非道はむくいたちまち此仕義、今こそ明かす因果話、要人も聞いてくれ元來我も奥州生れ思ひかへせば其昔可愛い倅を人買ひにさらわれしより世をのろひ、おのれ世界の人々にこの苦しみをもの見せんと幾恨歎も今この由良に三ヶの莊の主となり、鬼におとらぬ強慾非道、因果は忽ち娘にむくひ夜明けになれば鶏の啼き聲、それゆへにこそ世の人に鶏娘よと云はるゝ不憫さ、多くの鶏を身近に置くも娘が因果な鶏の啼き聲かくさん爲の親心、かゝる業果もある上

にコリヤ娘今又そちが手にかゝりし要人とは誰あらふ、現在そちが兄じやわやい、言ふに驚き要人が、エ、エツそんならお前が父上か、兄さんか、倅やい、とさしも鬼畜の父親も、恩愛血筋血の涙たもち兼ねて大聲上げ、わつと斗りに伏し沈めば、娘は苦しき息の下、ほんに思へば是程に因果は又とあるものか、初めて戀の手習ひに現在血肉の兄さんとも知らず戀したわしが身は、姿斗りか心まで世に淺間しい鶏娘、ほんのこれが畜生道、かう云ふ内も恥かしい早ふ死たいこれ兄さん、只一思ひに其刃殺して下され父上様、お前もこれから改まり善根ほどこし罪ほろぼし親子仲よふ暮してたも、これが私の此世の願ひ頼み上げますとゝさんといふ聲次第に弱り果て、惜しやつぼみの初花もついに果敢なくなりけり、今はの際に親思ふ心に父も要人も共に大聲泣く涙、由良の涙の水かさも一度に増すが如くなり、太夫はハット心付き、コリヤ要人、綱繼來らぬ其内に安壽姫對王様、幸ひ巖下のある舟へ片時も早ふとく立退け、早ふゝとせり立つ後、始終矢田部の綱繼弟雄すつくと立つて、ヤアどこへゝ仔細は聞いた、我を賣つたる三莊太夫、若者共々冥

途の道連れ、と切つてかゝるを要人が及取るより弟雄が脇腹、シヤこしやくなと綱繼が突くを突かせず三莊太夫突差の機轉雪つぶて、ひるむを要人一刀、うんと共に死してけり、早此上は御二人さまと走り寄て牢押明け、ともなひ申せば、のふ要人、ヲ、安壽様若君と互ひにむせぶ嬉し泣き、三莊太夫は容を正し、安壽姫様對王さまイザこれからはお心安かれ、要人の御供に佐渡に居ますと聞く母御前にとく御對面遊ばしませ、我れはこれより心も改め三ヶの莊も三ツの年地子を免ずも娘の菩提弔ふ門出の慈悲善根、とくく舟へおさらばも涙々の憂き別れいとしめやかにもれ來るは、曉かけて辰り舟、沖にやゆらく由良の戸の、おつと取拵合點じや、えいくくのほんえほん帆を卷立ての舟乗は便りを松の鳥かげやとも綱といてこぎ出す、舟には要人のび上り、父は巖につゝ立ちて目を見張るれどかすむ目の、拂へど袖に散りかゝる雪か突か憂涙、流れてぬぐふ罪科も吹雪に清め三界唯心、安壽さまア、對王様ア、鹿比丸やアいくと呼ぶ聲も、風に消え行波の上、思ひ亂れて千々に降る、雪に姿も遠ざかり、只曉を告げの鳥、生は善なる人の世の所

も丹後に名も高き由良の湊の千軒長者三莊太夫と後々に語り傳へて残りける。



道行初音の旅路



靜御前  
狐忠信

竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹  
本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本  
南伊七雛つ文越松南綱勝重一葉猿友友友友友友友  
部達五三太太太太太太太太太太太太太太太太太  
郎門郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎  
平造郎門郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎郎

道行初音の旅路  
川連法眼館の段

義經千本櫻

延享四年（二四〇七）十一月十六日初日で竹本座にて上演。作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳。全五段からなり、二段目の渡海屋から大物ヶ浦、三段目の椎の木から小金吾討死、鯨屋、四段目の道行初音の旅から川連館まで等が殊に有名である。義經傳説中の堀川夜討、大物浦、吉野落等が骨子となつてゐるが、佐藤忠信を重用した上、壇の浦敗北後の平知盛（渡海屋銀平）、平維盛（鯨屋彌助）、能登守平教經（横河覺範）等を把へて後日譚の形式に活かし、結果からみて義經の傳説そのものよりも忠信に関する部分を中心となり、又一貫してゐるとも見られるが、そこに平家方を中心とした三種の挿話を夫々脚色性を保たしめつゝ有機的に巧みに統一し成功した浄曲中の名作である。

人形役割割

靜 御前 吉田文五郎  
 狐 忠信 玉藏改め 吉田玉造  
 川連法眼館の段

人形役割割

靜 御前 吉田文五郎  
 狐 忠信 玉藏改め 吉田玉造  
 佐藤四郎忠信  
 源 義忠 吉田光之  
 龜 井 義忠 吉田光之  
 片岡八郎 桐田榮三郎  
 桐竹紋司

(替日毎役)  
 前 鶴竹 豊竹 豊竹 豊竹  
 後 鶴竹 豊竹 豊竹 豊竹  
 切 鶴竹 豊竹 豊竹 豊竹  
 ツレ 野鶴 野鶴 野鶴 野鶴  
 澤澤澤澤 澤澤澤澤  
 吉友清衛 吉友清衛  
 季門六夫 季門六夫  
 助夫郎夫 助夫郎夫  
 太治太 太治太  
 春重太 春重太  
 寛重太 寛重太  
 本重太 本重太  
 本重太 本重太  
 古靱太 古靱太

梗概

九郎判官義經は、鎌倉方の詮議も厳しく、身の置き所に窮した揚句吉野山の東光坊の弟子川連法眼の元に難を避けてかくまはれて居た。

狐の忠信を供に連れた靜御前は義經の後を慕つて、この川連法眼の館へ来てみると驚いたことに、もう一人佐藤忠信が既に來てゐるのだ。靜の連れて來た忠信には未だ會はないが、義經は何としても怪しいことゝ不審がつた。靜もさう云はれてみれば此處まで來る道々、拜領の初音の鼓を旅のつれづれに打つ度毎に不思議な様子をする忠信が訝しくてならなかつた。ある時は忠信と道にはぐれ、鼓を打てば何處からともなく現れる不思議さ。いま到着の筈の忠信を如何にさがしても、一向に見當らないのも亦、不可思議の一つであつた。

義經は靜に命じて初音の鼓を打たせ忠信の正體を見とゞけさせることになつた。そして若し怪し



いことあらばと一刀を渡された。

静は鼓を打つた。清々としたその音につれ果して忠信は現はれた。さてこそと静が一刀を以て切り付けるその手を抑へる忠信。實の忠信白狀せよと仰せを受けた静が詮議、サア〜と責め立てられ遂に忠信は、その本性を明すのだった。

その昔桓武天皇の御代、内裏に雨乞の行事があつた。その折大和の國に千年の劫經る牝狐牡狐が狩り出され、その皮で鼓が作られた。この鼓を打つと降る雨に民百姓も潤ほつたと云ふのである、これを初音の鼓と名付けた。

忠信は實は、その牝狐牡狐の子であつた。この度初音の鼓が義經の手に渡るより親戀しさに子狐は鼓につき従つて居た。去りし日稻荷の森で義經が忠信の居ないのを悔んだのを聞いて、子狐は忠信の姿となり、以來静御前に従つて此處まで來たのだつた。そして鼓の音は畜生ながら兩親の聲と聞え、それに呼び返され幾度か静の元へ戻つたこと

もあつた。

今靜が打つ鼓の音は、兩親が元の古栖へ歸れとの聲ゆへ、もうお別れ致します、今迄大將のお目を掠めし段々、お詫びなされて下さいませ、と狐の忠信は涙ながら暇乞ひをし、又なつかしい鼓の父母に悲しい別れを告げるのだつた。

この様子を見た義經は狐の心根が不憫でならなかつた。狐は義經を伏し拜み乍ら消え失せた。あれよび返せと御詫あつて靜は又も鼓を打つたけれど、鼓は音もせず親子の別れを悲しんで音せぬ鼓の不思議さに靜は涙にくれたのであつた。其處へ再び姿を現はした狐に、義經は初音の鼓を與へたこがれ慕ふ親の鼓を有難く頂いた子狐は、義經を何處までも守護なさんと喜び勇んで姿を消して行つた。

(床本) 道行初音の旅路

戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや忠

とまことの武士に君が情とあづけられしづかに忍ぶ都をば後に見捨て、たびだちてつくらぬなりもよしつねの御行末はなにはづのなみにゆられて、たゞよひて今はよしのと人づてのうはさを道のしほりにて大和路さしてしたひゆく。見渡せばよもの梢もほころびて梅が枝うたふうたひめのさとの男が聲々にわがつまが、てんじやうぬけてすえるせん、ひるのまぐらはつがもなや、天じようぬけてすえるせん、ひるのまぐらはつがもなや、つがもなや、おかしからすの一ふしに人も、わらやのそだちにも春ははねつくてまり、ひいふうつくづくときけばこち風音そへて、こぞの氷を徳若にごまんざいと君もさかへましますありけふありやたのもしや。さぞなやまとの人ならば御かくれがをいざ問はん、われも初音の此つとみ君のさかへを壽ぎて、むかしを今になすよしもがな、たにのうぐひすもはつねのつとみくしらべあやなす音につれてつれてまねくさおくればせなる忠信の旅すがた、せなに風呂敷をしかとせたらおふて野みち、あぜみちゆらり／＼かるとい取なりいそいと、めだゝぬ様に道へだて女中の足とあなどつて囁お待かね、こゝ幸ひの人目な

しとせいめいそへて賜はりし御きせながを取出し、きみと敬ひ奉る、静はつゞみを御顔とよそへて上におきの石人こそ知らぬ西國へ御げごうの御海上、浪風あらく御船を住吉浦に吹上られ夫よりよしのにまします由、やがてぞ參り候はんとたがひにかたみをとりにおさめ雁とつばめはどちらが可愛や、を育つるつばめが可愛い、花を見するかりがねならば、ふみの便りも又の縁エ、そふじやいな、うたふ聲々面白や實に此鎧を賜はりしも兄繼信が忠勤也誠にそれよ越方の思ひぞ出る埴の浦の海に兵船平家の赤旗陸に白旗源氏の強者アラ物々しやと夕日影に長刀を引そばめ何某は平家の侍悪七兵衛景清と名

乗かけ、なぎ立て、なぎ立つれば花にあらしのちり、ばつと木の葉武者言ひがひなし出や旁々よ三尾の谷の四郎是にありと渚に丁と打つてかゝる刀を拂ふ長刀のゑならぬ振舞何れ共勝り劣りも波の音。打合太刀の鎧元より折て引沙歸るかり、勝負の花を見捨つるかど長刀小脇にかい込で兜のしころを引摺み後へ引くあしよろ、向ふへ行足たぢ、むんづとしころを引切て双方尻居にどつかと座す腕の強さと言ひければ首の骨こそ

強けれとへへ、ホ、ホ、笑し後は入亂れ手しげきはたらしき兄繼信君の御馬の矢表に駒をかけすへ立ふきがる才、聞及ぶ其時に平家の方には名高き強弓能登の守教經と名乗もあへず、よつびいて放つ矢さきはうらめしや兄繼信が胸板にたまりもあへず眞逆様あへなき最期は武士の忠臣義士の名を残す思ひ出るも涙にて袖はかはかぬつ、井筒いつか御身ものびやかに春の柳生の糸ながく枝をつらぬる御ちぎりなどかはくちしかるべきとたがひにいさめいさめられ急ぐとすれどはかどらぬ若原峠かうのさとつちだむつだも遠からぬのちの春風吹はらひくもと見まがふ三芳野の麓の里にぞつきにける。

(床本) 川連法眼館の段(切)

圓原やはゞきゞならで有と見し人の身の上いぶかしく窺ひ出る足音も静は君の仰を受け手に取上げて引結ぶしんき深紅をない交の調べ結んで胴かけて手の中しめて肩に上手品もゆうに打ならす聲清々と澄渡り心耳を澄す妙音は世に類なき初音の鼓、彼洛陽に聞へたる會稽城門の越の鼓斯くやと思ふ春風に誘れ來る佐藤忠信靜が前に兩





手をつき音に聞取れし其風情すわやと見れど打ち止まず猶も様子を調の音色聞入り聞いる餘念の體怪しき者とは見て取る静折よしと鼓を止め遅かつた忠信殿我君様のお待兼、サア〜奥へと何氣なき詞にはつとは言ながら座を立ちおかれて差うつむく油断を見濟し切付るをひらりと飛退き飛しさりコハ何となさるゝぞと咎められて氣轉の笑ひホ、ホ、ホ、あの人ゝの氣疎い顔久しぶりの静が舞見よふと御意遊す故八嶋の軍物語りを舞の稽古と鼓を早め斯て源平入亂れ船は陸路へ陸は磯へ漕寄せ打出で打ならす鼓に又も聞入つて餘念たわひもなき所を忠信やらぬと又切りかゝる太刀筋かはしてかいくゞるを付け入柄元しつかと取り何科有りてだまし討に切らるゝ鶯へかつてなしと刀たぐつて投捨つれば鷹忠信のサア白狀仰を受けた静が詮議言はずばかりして言はすと鼓追つ取りはた〜女のか弱き腕さきに打ち立られてハア〜はつと誤り入つたる忠信に鼓打ち付けサア白狀サア〜サアと詰寄せられ一句一答詞なく只ひれ伏て居たりしが漸に頭をもたげ初音の鼓手に取上げさもうや〜しく押戴き〜、静の前に直し置きしづ〜立て廣庭へ

おりの姿もしほ〜と身すばらしげに手をつかへ、けふが日迄隠しお〜せ人にしらせぬ身の上成れ共今日國より歸つたる誠の忠信に御不審のかゝり難儀と成る故を據なく身の上を申上の始りは夫なる初音の鼓桓武天皇の御宇内裏に雨乞有りし時此大和國に千年の劫經し牝狐牡狐二正の狐を狩出し其狐の生き皮を以て拵へたる其鼓雨の神を諫めの神樂、日に向ふて是を打ば鼓は元來波の音、狐は陰の獸故水を起して降雨に民百姓は悦びの聲を初めてあげしより初音の鼓と號賜ふ、其鼓は私が親私めは其鼓の子でござりますと語るにぞつとこはげ立騒ぐ心を押ししづめム、そなたの親は此鼓。鼓の子じやといやるからは扱てはそなたはマ狐じやのハツア成る程雨の祈に二親の狐を取られ殺された其時は親子の差別も悲しい事も辨へなきまだ子狐藻を被ぐ程年も丈け鳥居の數も重なれど一日親をも養はず産みの恩を送らねば豚狼にも劣りし故六萬四千の狐の下座に着き只野狐と下しまれ官上りの願も叶はず親に不孝な子が有れば畜生よ野良狐と人間ではおつしやれ共鳩の子は親鳥より枝を下つて禮儀を述鳥は親の養を育返すも皆孝行、鳥でさへ其通りまして人の詞

に通じ人の情けも知る狐、何ほ愚痴無智の畜生でも孝行といふ事をしらいで何と致しませう、とは言ふものゝ親はなしまだも頼みは其鼓千年劫ふる威徳には皮に魂留つて性根入たは則ち親付添て守護するはまだ此上の孝行と思へども淺ましや禁中に留置賜へば八百萬神宿直の御番恐れ有れば寄付れず頼の綱も切果しは前世に誰れを罪せしぞ人の爲に仇する者狐と生れ來るといふ因果の經文恨めしく日に三度夜に三度五臟を絞る血の涙火焰と見ゆる狐火は胸を焦する炎ぞやかほど業因深き身も天道様の御恵みで不思議にも初音の鼓義經公の御手に入内裏を出づれば恐れもなしハツア嬉しや悦ばしやと其日より付き添は義經公の皆お蔭稻荷の森にて忠信が在合さばとの御悔みせめて御恩を送らんと其忠信に成りかはり靜様の御難儀を救ひました御褒美と有つて勿體なや畜生に清和天皇の後胤源九郎義經といふ御姓名を賜はりしは空恐しき身の冥加是といふも我親に孝行が盡したい親大事くと思ひ込んだ心が届き大將の御名を下されしは人間の果を受けたる同然、愈親が猶大切片時も離れず付添鼓靜様は又我君を戀慕ふ調べの音かはらぬ音色と聞ゆれ共

此耳へは二親が物言ふ聲と聞ゆる故呼び返されて幾度か戻つた事もござりました。只今の鼓の音は私故に忠信殿君の御不審蒙つて暫らくも忠臣を苦すは汝が科、早々歸れと父母が教の詞に力なく元の古巢へ歸ります。今迄は大將の御目を掠し段お情には靜様お詫なされて下さりませと、椽の下より延上り我親鼓に打向かひ、かはす詞のしり聲も涙乍の暇乞、人間よりは睦まじく親父様母様お詞を背きませず、私はもふお暇申ます。とは言ながら御名殘おしかるまいか二親に別れた折は何にもしらず、一日く立に付暫らくもお傍に居たい産みの恩が送りたいと思ひ暮し泣き明かしこがれた月日は四百年雨乞故に殺されしと思へば照る日が恨しく曇らぬ雨は我涙願ひ叶ふが嬉しさに年月馴し妻狐中に設けし我子狐不憫さ餘つて幾度か引るゝ心を胴窓に荒野に捨てて出ながら飢はせぬか凍はせぬか若獵人に取られはせぬか我親を慕ふ程、我子もてうど此様に我を慕はぶがと案じ過しがせらるゝは切つても切れぬ輪廻のきづな愛着の鎖に繋ぎ留られて肉も骨身も碎くる程悲しい妻子を振捨て去年の春から付き添て丸一年立や立ず去ねと有ると何とまああ

つと申て去れましょかいの、お詞背かば不孝となり盡した心も水の泡せつなきが餘つてかへる此身は何たる業まだせめてもの思ひ出に大將の賜はつたる源九郎を我名にして末世末代呼ばるゝ共此盡しきは何とせん、心を推量し賜へと泣つくだいつ身もだへしどうど伏して泣き叫ぶは大和國の源九郎狐と言傳へしも哀なり。靜はさすが女氣の彼が誠に目もうるみ一間の方に打向ひ我君それにましますかと申す内より障子を開きテ、委しく聞届し扱ては人にてなかりしな今迄は義經も狐とは知らざりし、不憫の心と有ければ頭をうなだれ禮をなし御大將を伏拜し座を立は立ながら鼓の方をなつかしげに見かへりゝ行くとなく消る共なき春霞人目臙に見へざれば大將哀と思召しアレ呼び返へせ鼓打て音に連れ又も歸りこん鼓々と有りけるにぞ靜は又も取り上げて打ば不思議や音は出ず是はゝと取直し打て共ゝこはいかに上とも平とも音せぬはヘア扱ては魂残す此鼓親子の別れを悲しんで音を留めたよな人ならぬ身もそれ程に子故にものを思ふかと打しほるれば義經公ヲ、我とても生類の恩愛の節義身にせまる一日の孝もなき父義朝を長田に討たれ日か

げ鞍馬に人と成りせめては兄の頼朝にと身を西海の浮き沈み忠勤仇なる御憎しみ親共思ふ兄親に見捨てられし義經が名を譲つたる源九郎は前世の業我も業そもいつの世の宿酬にてかゝる業因なりけるぞと身につまざるゝ御涙に靜はわつと泣き出せば目にこそ見へぬ庭の面我が身の上と大將の御身の上を一口に勿體涙に源九郎もち兼たる大聲にわつと叫べば我れと我が姿を包む春霞はれて形を現せり義經御座を立給ひ手づから鼓取上て、ヤイ源九郎靜を預り永ゝの介抱詞には述がたし禁裏より給はり大切のものなれ共是を汝に得さすると差出し賜へば何其鼓を下されんとやヘアゝゝ有難や忝やこがれ慕ふた親鼓御辭退申さず頂戴せん重々深き御恩のお禮今より君の影身に添御身の危き時は一つ方を防奉らん返すゝも嬉しやなヲ、それよそれ身の上に取り紛れ申す事忘つたり一山の惡僧ばら今夜此館を夜討ちにせんと企てたり押し寄せさするまでもなし我が轉變の通力にて衆徒を残らずたばかつて此館へ引き入ゝ眞向立割車切又一時にかゝりし時蜘蛛手かけ繩十文字或は右袈裟左げさ上を拂へば沈で受け裾を拂はゞひらりと飛びいしやう秘術は得たりやゝ御手に入れて亡すべし必ずぬからせ賜ふなど鼓を取つて禮をなし飛が如くに行末の後をくらし失せにける。

生いき寫うつし朝あさ顔がほ日にっ記き  
 島田驛宿屋の段  
 大井川の段





島田驛宿屋の段

生寫朝顔日記

島田驛宿屋の段  
大井川の段

人形役割

琴  
野豊 鶴竹野竹  
澤澤 澤本澤本  
吉仙 重南勝伊  
三 部 達 太  
藏郎 造夫平夫

朝 駒 澤 次郎左衛門 額  
戎 屋 徳右衛門  
岩 代 多喜太  
下 女 お鍋  
桐 竹 紋 十 郎  
桐 竹 龜 松  
吉 田 玉 徳  
桐 竹 門 次

この曲は最初山田案山子の名で近松徳叟が熊澤蕃山の作と傳へられる「露のひぬ間」の朝顔の歌をもととして「生寫朝顔日記」を作つたが上演に到らずして文化七年八月(二四七〇)病歿した。翌年、近松柳作「徳叟遺稿朝顔日記」の讀本が刊行され、それが大好評だったので天保三年正月(二四九二)耶麻田加々子を添削者として「生寫朝顔話」の外題で稻荷の文樂芝居に上演されたそれを更に嘉永三年正月(二五一〇)山田案山子遺稿、翠松園主人校補と銘打ち「増補生寫朝顔話」全五冊十五段として刊行、爾來「朝顔日記」としてこれが廣く世に行はれるに到つたのである。

梗概

駒澤次郎左衛門は仕官して江戸へ赴く途中、東

大井川の段

（竹本）  
本南  
本伊  
達部  
太夫  
豊澤新左衛門

人形役割割

朝顔 桐竹紋十郎

川越 大ぜい

海道島田宿の宿屋戎屋の、灯影も淋しい奥の間で  
衝立の張交にある地紙の歌にフト目をつけた。

それは先年山城の宇治で、戀しあつた秋月の娘  
深雪の扇に、また逢ふ日迄のかたみにと、書き與  
へた朝顔の歌である。其後圖らず明石で舟待した  
時、琴に合せて深雪が節付け互ひの出船に悲しい  
別れをして、女が手づから此方の船へ投げ込んだ  
扇は、今此所に持つてゐる。

誰れが謳ひ傳へて、こんな東の驛路で見られる  
のだらう——。と、昔の思ひ出にふける處へ、宿  
の主人徳右衛門が來たので、話の序に、此の歌が  
どうして手に入つたかと訊いて見ると、

「いえ、其歌に就いては哀れな話がございます……」

徳右衛門は語り出した。

此邊を歌をうたつて歩く盲目の女——以前は中  
國邊の歴々の娘と云ふ事であるが、尋ねる人があ  
るとやらで家を捨て、諸々方々を流浪する中に、

とうとう眼を泣き潰して、後の月までは濱松邊で其歌をうたつて袖乞ひをしてゐると、國許から由縁の女がたづねて來たが、其女も程なく病死をしたので其後は又一人で此の邊までやつて來る。何が扱盲目でこそあれ器量はよし、聲はよし、見る程の者がいぢらしがり、朝顔々々と呼んで、今は其歌を知らぬ者もない——と、主人の泪話であつた。

次郎左衛門は聞くよりひと身に應へて、若しや云ひ交した我が妻ではなからうか——と、轟く胸を押し靜めてそれは哀れな話、旅のつれづれを慰める爲に其女を呼ばうと云ふので、主は心得て立つた。その後へ相役の岩代多喜太がのさ／＼と出て來たが、朝顔が來ると聞くと、乞食を座敷へは通されぬ、と云ひ張るのだ。が、次郎左衛門に云ひこめられて口を噤む時、呼ばれて庭へ通る瞽女。召しましたは此のお座敷でござりますか、拙い調べも御笑ひ種、おはもぢ様やと會釋をした。

見ればそれこそ紛れもない深雪のなれの果である次郎左衛門は不愠の思ひに、こみ上げる涙を吞んで控へて居た。眼前に焦れる人の居るとも知らず朝顔は探り手に琴掻き鳴らし露の干ぬ間の朝顔をと、涙に曇る爪調べ、岩代は興に入り、今一曲と所望するが、次郎左衛門は之を止めるので、然らば身の上話をと望む。朝顔は宇治の螢狩りの事から、二度目に逢ひは逢ひながら、つれない嵐に吹き分けられ國へ歸れば父母の思ひも寄らぬ夫定め、操を破るまいと屋敷を脱出し、さまよふ中に目を泣き潰した次第と語り、泣く／＼暇乞ひして何となく耳に残る駒澤の詞を思ひつゝ立歸るのだつた。岩代が奥へ入つた後次郎左衛門は主を呼んで、朝顔をもう一度呼よせてくれまいかと尋ねたが、今夜の間には合ふまいとの返事に、此の前の扇と、金子に秘法の目薬を添へ、後で渡してくれと頼み置いて心ならずも岩代と共に出立した。朝顔は何か氣にかゝつて歸つて來たので、徳右衛門



は預かりの三品を渡した。此の扇から朝顔は、駒澤次郎左衛門を尋ねる宮城阿曾次郎その人と知り主の止めるも聞かず、降り頻る雨の中を、狂氣の如く後を慕ふて駆けて行つた。

名に高い街道一の大井川は、篠を亂して降る雨に漲り落つる水音がすさまじい限りである。夫を慕ふ一念に、朝顔は倒けつ轉びつ、漸う川の傍まで辿りついて、駒澤次郎左衛門様と云ふお侍、最早や川をお越しなされたかと問へば、その侍は今の先渡つて、後は大水で川止めだ、と川越の人足共が口々に知らせる。それと聞くより朝顔は張詰めた力も抜けて、伏し轉び前後不覺に泣いたが、又起上つて見えぬ目に天を睨み、焦れ／＼た其人に、逢ふても知らぬ盲目の此目は、如何なる悪業ぞや夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松浦湯、巾領振山の悲しみも、身に比べては……と口説泣くのどつた。はては未來で添ふを樂しみに此處を三途

の川と定めて、既に身を投げやうとする。

處へ、徳右衛門と下郎の關助とが駆けつけて抱き止めた。徳右衛門は深雪の乳母淺香こそ我娘と知つて命を棄て、其血で駒澤の残した秘藥を飲ませると、不思議や朝顔の眼は開いた。早明渡る鶏の聲に河の面も白みそめる。

### (佐和利) 宿屋の段

ハイ／＼、歌ひますのでござりますと、焦るゝ夫の在るぞとも、知らぬ盲の探り手に、戀故心盡し琴、誰かは憂きを斗爲吟の、絲より細き指先に、指す爪さへも八ツ橋の、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪調べ露の干ぬ間の朝顔を、照らす日かげのつれなきに、哀れ一むら雨のはら／＼と降れかし。

ハイ／＼能う問うて下さります、お言葉にあまへお話し申すも耻しながら、元私は中國生れ様子あつて上方住

居、すぎし卯月の中空に、都の辰巳宇治の船、こがれよ  
 るべの螢狩に思ひそめたる戀人と語らふ間さへ夏の夜の  
 短い契りの本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、思ふに任  
 せぬ國の迎ひ。親々に誘はれ浪花の浦を船出して、身を  
 盡したる憂思ひ、泣いて明石の風待に、偶々逢ひは逢ひ  
 ながら、つれなき嵐に吹分けられ、國に歸れば父母の、  
 思ひも寄りぬ夫定め、立る操を破らじと、屋敷を抜けて  
 數々の、憂目を凌ぎ都路へ、上つて聞けば其人は、東の  
 旅と聞く悲しさ、又も都を迷ひ出で、何時かは巡り逢坂  
 の、關路をあとに近江路や、美濃尾張さへ定めなく、戀  
 し〜に目を泣き潰し、物の文色も水鳥の、陸にさまよ  
 ぶ悲しさは、何の世如何なる報にて、重々の欺きの數、  
 憐れみ給へとばかりにて、聲を忍びて欺きける。

## 大井川の段

ヤアナニ川が止つた。ハ、ア、悲しやと張詰めし、力  
 も落ちて伏轉び、前後不覺に泣きけるが、又起き上がつ  
 て見えぬ目に空を睨んで、天道様、エ、聞えませぬ〜  
 〜わいな。此年月の艱難辛苦も、何卒最一度其人に、

逢はせてたべと片時も、祈らぬ間とては無い者を、今日  
 に限つて此大兩川止めとは〜、エ、何事ぞいの。思へ  
 ば此身は先の世で、如何なる事の罪せしぞ、扱も扱も味  
 氣無や焦れ〜た其人に、逢ふても知らぬ盲目の、此目  
 は如何なる惡業ぞや、夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松  
 浦濁、巾領振山の悲しみも、身に比べては數ならず、三  
 千世界を尋ねても、こんな因果又と世に有るべきかと、  
 口説き立て、拳を握り身を震はし、流涕焦れ欺きしは餘  
 所の見る目も哀れなり。



## 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、**三業**より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があら

はれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノポーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がゝりて、寫實的に遣ふや

うになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」  
(葛の葉の狂言) からといふことになつてゐる。

今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣

ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞

臺に相當して、屋内に用ひられる。最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

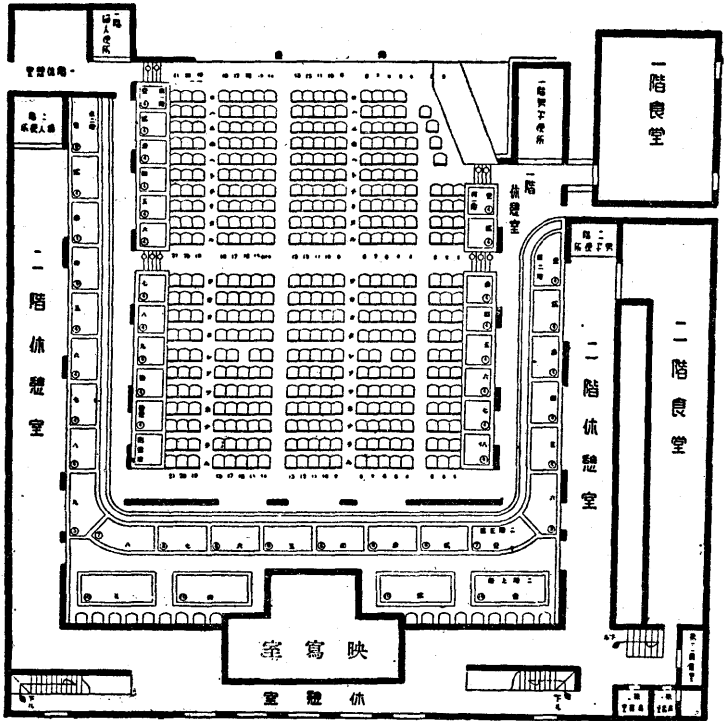
また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃は、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつたそれが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、

出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で、複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)

# 内案御席場御座文



御、觀、覽、席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します。また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます。御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ります。

切、符、賣、場・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

# 六月の芝居御案内

座南都京四條	座天辨道頓堀	座角道頓堀	座中道頓堀	座伎舞歌大阪
電話一五一五	電話二八七	電話二二二	電話二一七	電話二六八
一日初日 半時二日毎 演開	一日初日一卅 開二午正晝 演回時五夜	一日初日一卅 開二午正晝 演回時五夜	一日初日一 開二午正晝 演部時五夜	一日初日一卅 開二午正晝 演回時五夜
東京大歌舞伎	花形歌舞伎	厚生劇	關西大歌舞伎	松竹家庭劇
第一第二第三第四	第一第二第三第四	第一第二第三第四	第一第二第三第四	第一第二第三第四
清紅提極色	辰身替傾城	青舞踊劇	雙蝶々曲輪日記 海から来た鷺 由長湊千軒長者 名護屋城の秀吉	嘘妻下積の石
正誠	相肩	桂小五郎	日蓮記	と誠
附原平隨院馨石切	撫波の鳴門子	虎	繪本太功記 さくらあづま	積の石
忠録	観劇料	観劇料	一部観劇料	観劇料
衛切狩	一等席 一圓七十九錢 椅子席 七十七錢 平場 七十七錢 (入場税別)	特等席 一圓二十五錢 一等席 一圓二十五錢 二等席 一圓二十五錢 三等席 一圓二十五錢 (入場税別)	特等席 三圓四十六錢 一等席 二圓八十六錢 二等席 二圓七十九錢 三等席 一圓二十九錢 四等席 一圓二十九錢 五等席 七十七錢 (入場税別)	櫻席 八十五錢 菊席 八十錢 一等席 一圓三十錢 二等席 二圓三十錢 (入場税別)



# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

**當文樂座は** 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場であります

**文樂座人形淨瑠璃は** 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

**御携帶品は** 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

**貴重品は** 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます  
**お煙草は** 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

**お食事**は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。  
**賣店**は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。  
**お化粧とお手洗** 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

**場内にて** 寫眞撮影は絶対に断り致します。  
**御休憩の間は** 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

**お出口は** 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

**案内人は** 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

**出演者** 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇  
當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として  
案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次第参上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南①三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十七年五月卅日印刷  
昭和十七年六月一日發行  
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地  
松竹株式會社大阪支店內  
發行人 鳥江鏡也

大阪市西區土佐場通一丁目十二  
印刷所 永井日英堂印刷所  
一部 金二十錢

